

(二) 短歌

A型

たいら たたのり
一平の忠なむ

行きくれて 木の下かげを 宿とせば

花や今宵の主なるらむ

行きくれて 木の下かげを 宿とせば

花や今宵の主なるらむ

(作者) 平の忠度 (天養元年1178年—元暦元年1184年) 平安時代の平家一門の武将。平清盛の異母弟・歌人として優れ藤原俊成に師事した。「千載和歌集」の選者俊成は朝敵となった忠度の名を懼り「故郷の花」という題で詠まれた歌一首のみ詠み人知らずとして掲載。ささなみや志賀の都は荒れにしを昔ながらの山桜かな

「一ノ谷の戦い」で、源氏方岡部忠澄に討たれたが、忠度の籠に結びつけられた文を解いてみると「旅宿の花」という題で一種の歌が詠まれていた。その歌が子の歌であった。

行(ゆ)きくれて木(こ)の下(した)かげを宿(やど)とせば 花や今宵の主(あるじ)なるらむ